

# 総合社会学科 課題

【課題1】 次の社説を読み、筆者が AI について問題だと考えている点とその理由を整理して社説の内容を 400 字程度で要約しなさい。

【課題2】 あなたがこの社説を読んで考えたことや学んだことを 400 字程度で述べなさい。

(社説) 海図なき世界 AI に揺れる社会 主役が人であるためには

新しい技術には予期せぬリスクがつきものだ。人工知能 (AI) の普及がもたらす社会の変化に、敏感であらねばならない。行政の効率化を進めようと AI を導入したことで、深刻な人権侵害を招いたケースがある。オランダの税務当局が 2013 年ごろ、AI を使って児童手当の不正受給者を特定するシステムを導入した。その結果、約 2 万 6000 人に誤って返還請求をする事態が起きた。生活が崩壊し、うつ病や自殺未遂に追い込まれたケースもあった。AI のアルゴリズムで、外国籍の申請者は不正の可能性が高くなるよう設定されていたと報じられている。こうした問題を背景に、欧州連合 (EU) が 24 年に成立させたのが AI 規制法だ。リスクに応じて義務や罰則を定めた世界初の包括規制である。

< 偏見や差別生む恐れも >

AI のアルゴリズムは、いくつものリスクをはらむ。偏見や差別を含むデータを学習すれば、結果にもバイアス (偏り) が加わる。人種や出身地を基に差別的な扱いをした場合、ローン審査などで特定の人々が不利益を被る。AI のデータ処理の多くは、外部から見えない「ブラックボックス」になっており、偏りを見抜くことは難しい。学習過程で著作物が無断利用される著作権侵害も起きている。

専門知識がなくても使える生成 AI の登場により、民主主義の基盤が損なわれる可能性も出てきた。もっともらしい偽情報を容易に量産できることから、人々の認知をゆがめ、世論操作や選挙介入にも悪用され得る。サイバー攻撃や兵器への利用も懸念される。権威主義体制下で市民の監視に使われる恐れもある。

EU の欧州委員会でデジタル・競争政策を推進してきたマルグレーテ・ベステア一元上級副委員長は 24 年の演説で、核兵器が世界を変えたのと同様に、AI も社会の前提を変える力を持っていると指摘し、「技術が人類に挑戦している。リスクの制御が最優先課題だ」と訴えた。ただ、規制で国際的に足並みをそろえることは容易ではない。各国で安全保障や産業政策上の利害が異なるほか、AI の開発は主に民間企業が担っているからだ。開発をリードする米国では、AI 市場が今後さらに拡大するとの期待を背景に株価が上昇している。トランプ米大統領は、第二次世界大戦で原爆を開発した「マンハッタン計画」に比肩する国家事業として AI 開発を位置づけ、推進している。リスクが軽視されかねない状況だ。「チャット GPT」を手がける米オープン AI は 15 年、AI を通じて人類に貢献することを目指す非営利組織として設立されたが、巨額の費用がかかるとしてビジネス重視にかじを切った。厳しい規制は技術革新を阻み、企業競争力をそぎかねないとの批判を受け、EU も規制の緩和に動いている。

< 想像力でリスク回避を >

だが今、求められているのは安心して使える AI である。規制を有効に使えば、開発を後押しできるはずだ。営利を優先し、倫理が置き去りにされることがあってはならない。AI 研究でノーベル物理学賞を受賞し、米グーグルで深層学習の実用化を主導したジェフリー・ヒントン氏が 23 年に退社したのは、AI の脅威について公の立場で警鐘を鳴らすためだという。懸念されるのは、人間が AI への依存を強めることだ。アルゴリズムに潜むバイアスを見過ごしたまま AI に判断を委ねれば、社会に深刻な不利益をもたらす。

人間の知能を超える「シンギュラリティー」が到来するともいわれる。人間に代わって AI が社会を動かすような未来が訪れた場合、どのようなリスクが生じるのか見通すのは難しい。AI の基礎となる人工神経回路の学習理論を築いた数理工学者の甘利俊一・帝京大特任教授は、リスクへの向き合い方として「答えをうのみにせず自分の頭で考えることの楽しさや、人によって考え方が違うということ、子どものころから教育を通じて養うことが必要だ」と強調する。AI は暮らしを豊かにする道具であり、主役はあくまでも人間だ。想像力を働かせ、リスクに備えて対策を講じる必要がある。

毎日新聞 2026 年 1 月 12 日 (月) 朝刊